



熱傷の診断, 重症度の判定

松村 一

東京医科大学 形成外科学分野 主任教授

Point

- ▶ 熱傷深度は, 皮膚の色, 水疱の有無, 疼痛などにより判定する
- ▶ 浅達性II度熱傷か深達性II度熱傷かの判断は臨床的に重要であるが, 判断が困難なこともある
- ▶ 熱傷面積は年齢によって5の法則, 9の法則を使い分ける。小範囲熱傷では手掌法も有用である
- ▶ 熱傷指数, 熱傷予後指数で重症度と予後を判断する

はじめに

熱傷診療において最初に必要なのは、熱傷深度と受傷面積を正確に把握することです。これらにより、重症度とそれによる予後を判断して、どのような施設でどんな治療を行うかを決定します。重症と判断された場合、または、特殊な治療を

要する場合には、熱傷を専門的に治療することのできる施設に転送することも求められます。したがって、本章は、熱傷診療の最も基本的事項で重要なものです。

熱傷深度の診断法

熱傷深度の分類

熱傷深度は、通常I度からIII度に分類し、II度

をさらに浅達性と深達性II度熱傷に分類します(図1)。

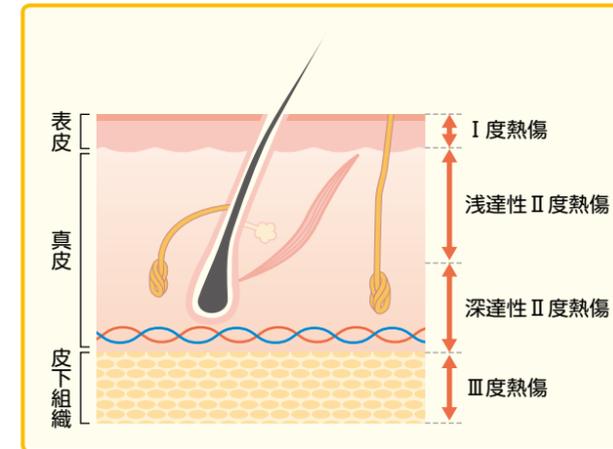


図1 熱傷深度分類 (文献¹⁾を参考に作成)



図2 20歳代男性: 高温液体による浅達性II度熱傷

A: 水疱を形成している
B: 水疱底はピンク色をしており, 浅達性II度熱傷と診断される

I度熱傷

I度熱傷 (first degree burn, epidermal burn) は表皮のみの損傷で、発赤と疼痛・熱感のみで、通常数日で治癒して瘢痕は残しません。日焼け (sun burn) の多くはI度熱傷です。

II度熱傷

II度熱傷 (second degree burn) は、損傷が真皮に及び、水疱を生じる熱傷です。

浅達性II度熱傷 (superficial dermal burn ; SDB, 図2) は、真皮浅層までの損傷で真皮深層の血流が保たれているために、水疱底の真皮はピンク色です。疼痛を強く訴えます。通常1~2週間で治癒して肥厚性瘢痕は残しません。

これに対して、深達性II度熱傷 (deep dermal burn ; DDB, 図3) は、真皮深層まで損傷が及んでいるために、水疱底の真皮は蒼白色となります。浅達性II度熱傷よりは疼痛は少なく、知覚が鈍麻してきます。治癒には、通常3~4週間を要して、肥厚性瘢痕を残す可能性が高くなります。



図3 50歳代女性: 高温液体 (天ぷら油) による深達性II度熱傷

水疱底は白色調で, 深達性II度熱傷と診断される